

編集後記

関東大震災から100年目の節目にあわせて公開された森達也監督の映画『福田村事件』を観た。政府主導の犬笛もあり、震災後、朝鮮人、中国人、社会主義者の虐殺が相次いだなかで、朝鮮人の疑いをかけられて殺された讃岐の行商人一行が描かれている。作品終盤、殺戮を免れた少年が、巡査部長の、「殺された9人とは家族同然だったんだろ」という言葉に、もうすぐ生まれるはずだった胎児を加えて10人だと言う。希望の望という漢字で、男であればのぞむ、女であればのぞみと名づけられることになっていた。続けて少年は、「9人にも、ちゃんと名前があるんです」と言って、被害者全員の氏名を口にする。

2023年現在、世界では複数の紛争が起こっている。加えて、10月には、イスラエル軍によるパレスチナ民族の浄化が始まった（10月14日、国連人権理事会の専門家が、イスラエル軍の行為を民族浄化に相当すると警告している）。イスラエル軍は、病院、学校、避難所、大学、インフラ施設を爆撃し、生き延びている人々も、食糧や水へのアクセスが困難な状態にある。11月6日にはガザ地区の死者が1万人を超え、その4割以上が子供だと、ガザ保健当局が発表した。ボリビアはイスラエルとの国交断絶をいち早く表明、チリ、コロンビア、ホンジュラス、ヨルダン、トルコ、バーレーンは駐イスラエル大使を召還する措置をとった。一方、日本、そして、西側諸国は、歴史上類を見ないこの大量虐殺に、驚くほど冷淡だ。

パレスチナ情報をスペイン語で発信しているメディアのなかに、生前の写真とともに、その人となりを紹介しているものがある。「最愛の娘という意味の名をつけられた、利発でしっかり者の赤毛の少女、将来の夢は医師になること。イスラエルに殺害される。享年8歳」(Palestina Hoy @hoypalestina) といった具合に。

すべての人には名前があり、望まれてこの世に生を受け、それぞれの人生のなかで、たくさんの人と関わりをもつ。

わたしたちは、関わっているはずなのだ。

編集委員長 児島 峰